

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	大学看護英語教育のマルチモダリティに関する実践的研究				
研究組織	代表者	所属・職名	言語コミュニケーション研究センター・特任講師	氏名	相羽 千州子
	研究分担者	所属・職名	京都府立医科大学・助教	氏名	ジェイソン・パロース
		所属・職名	埼玉県立大学他・非常勤講師	氏名	出水 純二
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	言語コミュニケーション研究センター・特任講師	氏名	相羽 千州子

講演題目
看護英語における VR 技術の受容要因

研究の目的、成果及び今後の展望

研究の目的 仮想現実(VR)技術は、身体性(embodiment)を保ちながらマルチモーダルなコミュニケーションを実現する。看護英語のように実技と切り離せない語学教育(ESP: English for Specific Purposes)において、VR 技術はどのような要因で受容されるだろうか。技術受容モデル(TAM: Technology Acceptance Model)によると、技術を使用しようとする行動意図 (BI) には、知覚された有用性 (PU)、知覚された使いやすさ (PEOU)、知覚された楽しさ (PE) が、実際の使用状況に影響を与えるとされる。本研究では、これに情報技術における個人の革新性 (PIIT) という因子を加えた修正モデル (図 1) の一部が、看護英語の VR に適合するかどうかを、次のようにして調査した。まず、発表者らが VR ヘッドセット Meta Quest 2 を装着し、看護技能を習得するための VR アプリ Tork VR Clean Hands Training を操作しながら、看護師役の主観映像 (17 分) を記録した。学生には、2つの大学で、この記録映像から切り出した投薬 (32 秒) の場面に会話音声の例を追加したサンプル映像をプロジェクターで視聴させた後、体温測定 (33 秒)、血圧測定 (32 秒) の場面の映像のみを見せながら、患者に対して話す英語をワークシートに記入してもらう形で VR を紹介した。アンケート調査では、VR を使いたいかな否か (BI) に関する質問 2 件、自身がふだんから新しい情報技術を試すかな否か (PIIT) についての質問 4 件を、いずれも 6 段階リッカート尺度で回答させた。

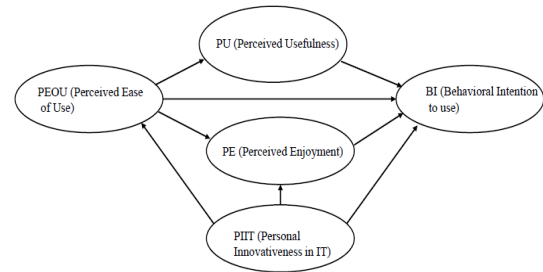


図 1 Metaverse 活用学習の修正 TAM

成果 得られたデータを JASP 0.19.2.0 を用いて分析し、(1) 大学間の t 検定により、BI の質問 2 件ではいずれも大学間の有意差があるが、PIIT の質問 4 件には大学間の有意差はないこと、(2) 確認的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis) では、 χ^2 検定により PIIT→BI の仮説が支持されること、の 2 点が明らかとなった。成果は、日本教育工学会 2025 年春季全国大会 (成城大学 3 月 9 日) で発表した。

今後の展望 修正 TAM モデルの他の部分については、学生が実際に VR を使用した後でアンケートを行うことが差し当たっての課題である。アンケートの自由記述からは、実際の看護画面に近い臨場感の中で、医療器具を使いながら患者への対応を学ぶことへの期待の一方で、操作性への不安、英語学習と両立との懸念も窺える。技術的な課題には、協調的な言語コミュニケーションを VR に組み込むことが挙げられる。